

平成 26 年 12 月 15 日

学位請求論文（課程博士） 審査報告書

学位請求論文：芸術への参与を動機づける社会的条件
——1980 年代旧東ドイツにおけるアンダーグラウンド文学の成立条件についての
システム理論に基づく芸術社会学的分析——

学位請求者：文学研究科社会学専攻 氏名 矢崎慶太郎

審査委員

主査 嶋根 克己
副査 川上 周三
副査 秋吉 美都
副査 村上 俊介

論文審査にいたる過程

矢崎慶太郎氏は、専修大学文学部人文学科を卒業後、専修大学大学院文学研究科社会学専攻の修士課程を修了した。修士論文は「インターネット」空間における公共圏の変容——アンダーグラウンド・サイトの成立とその衰退」であり、アンダーグラウンドにおけるコミュニケーション様式をシステム論的に理解する志向がすでに伺える。その後平成 21 年に博士後期課程に進学し、必要単位を取得し終えている。平成 24 年度にはマルティン・ルター大学ハレ＝ヴィッテンベルクにおいて交換留学生として一年間の研鑽を積んだ。

同氏はこれまで『専修社会学』『専修人間科学論集』『年報社会学論集』などに 7 本の学術論文を投稿・受理されており、なかでも関東社会学会の機関紙である『年報社会学論集』に掲載された「社会システム理論における芸術の社会的機能——なぜ人は芸術に参加するのか——」は査読審査を通過したうえでの掲載許可であり、学位請求論文執筆にむけての重要な布石となっている。

また同氏は本学位請求論文につながる基本的アイディアについて、関東社会学会において 2 回、日本社会学会において 1 回の学会研究報告を行っており、聴衆からの質問に応じて活発な討論を行ってきた。また社会学専攻が開催する中間報告会においても毎回報告し、社会学専攻の教員からさまざまな指導、指摘を受けながら論文を執筆してきた。指導教員が担当するゼミナールにおいても少しずつ原稿を紹介しながら、論文を積み重ねてきており、本論文が同氏の長年にわたる

精進の結晶であることは明白である。

こうしたプロセスを経て、同氏は平成 26 年 9 月に本論文を博士学位請求論文として提出するにいたった。

学位請求論文の内容と評価

矢崎慶太郎氏による学位請求論文（以下「本論文」と略記）は、全 4 章、143 頁とコンパクトではあるが、密度の濃い論文となっている。本論文で引用された文献や資料が 9 頁にわたって示されているが、ほとんどが日本語訳のないドイツ語の文献であり、同氏の高いドイツ語運用能力が伺える。

本論の問題設定は、「なぜ人びとはメッセージ性のない芸術活動に参加するのか、を明らかにすること」である。そのために 1980 年代の旧東ドイツにおけるアンダーグラウンド文学を具体的な事例として、その社会的状況をシステム論的な視点から説明しようとするものである。

第 1 章では、芸術に関するこれまでの社会学的アプローチの概観となっている。主要なアプローチとして、①社会外部の直接的反映としての芸術（マルクス）、②社会を超越した芸術（アドルノ、ゲーレン）、③社会に内包される芸術（ベッカー、ブルデュー、ルーマン）、④芸術の反映として記述される社会（ジンメル）などが紹介されている。第 2 章では、ルーマン理論を援用しながら芸術へのシステム論的な理解が試みられる。そもそもコミュニケーションとは何かにはじまり、芸術とは機能分化したひとつの自律的なシステムをなしているとの結論に至っている。第 3 章では旧東ドイツの置かれた状況について、経済、政治、社会的な観点から考察されている。消費の拡大にもかかわらず、抑圧の続く鬱屈した政治状況、その中で進む自己検閲的な状況などである。一部の芸術家たちは抗議の声を挙げるが、それも押しつぶされていく。第 4 章はそうした鬱屈した社会状況の中で、政治とは距離をとり、メッセージ性をも放棄して、ある種の「言葉遊び」に内閉していく、東ベルリンの一角に現れた作家集団を、「アンダーグラウンド文学の自律化」として描き出している。閉塞した社会に生まれる、外部と断絶した文化集団、それは外部者にとっては「意味のない」コミュニケーションをやり取りしているように思われている。しかし彼らは「独自のコミュニケーション・ルール」に従って行動しているのである。

本論文の優れてユニークな点は下記のとおりである。第一に、ルーマンの難解なシステム理論を、旧東ドイツの閉塞した社会に生まれた芸術に適用することで、芸術活動を行うことの本質的な意味について迫ろうとした点である。両者を結びつけて芸術を分析しようとした研究は、ドイツ語圏においても稀であろう。第二に、1980 年代の旧東ドイツの社会状況を緻密に分析している点である。統合「ドイツ」として経済的躍進を見せている現状において、旧東ドイツの社会問題に関心を寄せる日本人研究者は少ない。しかし閉塞した社会状況下においても、何らかの抵抗の姿勢を示したり、芸術という場に楽しみを見つけたりしようとし

た人々の営みが生き生きと示されている。ドイツ語原典資料からの広範で丹念な事実の積み上げがあつてこそ、こうした描写は可能になっている。第三に、「無意味さの意味」「何の効用もないことの効用」というパラドックスを社会的に解明しようと、果敢に挑戦したことである。思弁的に考えていけば、芸術にとどまらず、人間のすべての活動に「意味」はあるのか、という問いに逢着するであろう。「意味を探しだそうとする意味はない。あるのは生の楽しみが在るか無いかだけである」という哲学的な課題を社会的に追及した、ユニークな「作品」とであると判断できる。

他方、審査過程においては学術論文としていくつかの課題も指摘された。本論を構成する基本的な概念である「コミュニケーション」の定義があいまいである。受け手コードの形成についての記述が甘い。筆者のメッセージが結論から明晰に読み取りにくい、などである。

審査過程

研究科長から審査の負託を受けた主査 嶋根は、社会学専攻内から比較文化社会学を専門とする川上周三教授、コミュニケーション論を専門とする秋吉美都教授に加えて、旧東ドイツ社会について高い見識を持つ経済学研究科の村上俊介教授に副査を依頼して、審査委員会を組織した。

約一カ月の査読期間を経て、第一回審査委員会を11月末に開催し、矢崎氏のこれまでの経歴と業績、論文の執筆過程について情報を共有したのち、内容について検討した。その結果最終試験の実施が合意された。12月初旬に社会学専攻の教員立会いのもとに、口述試験が行われた。口述試験では矢崎氏から論文の概略についての説明の後、副査からの質疑に対して応答がなされた。

最終試験実施後、ただちに第二回審査委員会が開催され、主査および副査全員が、本論文と最終試験の結果に対して合格とした。

以上、厳正なる審査の結果、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。